

第2節 敷地銅鐸に関わる諸問題について

大野勝美

1. はじめに

敷地1～3号銅鐸は3つの重要な問題点を提起している。一つ目は銅鐸分布の東限問題である。敷地1～3号銅鐸は銅鐸分布域の東限に位置しているが、それは銅鐸祭祀の東限とみてよいのか、そしてその背景には何があったのか、という問題である。近年の大規模な発掘調査の成果によって、西遠江（静岡県西部の天竜川以西）の弥生時代の様子が明らかになりつつある。特に、この地に銅鐸が出現する直前と考えられる弥生時代中期後葉（長床様式期）の集落に関わる調査成果は注目すべきものがある。そこで、それらの成果を紹介しつつ、遠江における銅鐸および銅鐸関係品の分布状況とその背景について考えてみたい。

二つ目は三遠式銅鐸についてである。敷地1～3号銅鐸はすべて三遠式銅鐸に属し、この遺跡の西側に広がる西遠江は三遠式銅鐸の分布の中心地である。そこで、三遠式銅鐸とは何か、どのような特徴があるのか、分類・編年の研究成果によって敷地1～3号銅鐸はどこに位置づけられるのか、また三遠式と近畿式との関係はどのようなものであったのかについて見ていきたい。

三つ目は銅鐸の多数埋納問題である。敷地1～3号銅鐸は同一斜面に埋められていた可能性が非常に高い。全国には、同じ場所に3個以上の銅鐸が埋められていた多数埋納地が多く存在するが、それらを集成すると共に、何の目的で同じ場所に多数の銅鐸が埋められたのかを考えてみたい。

2. 銅鐸祭祀の東限

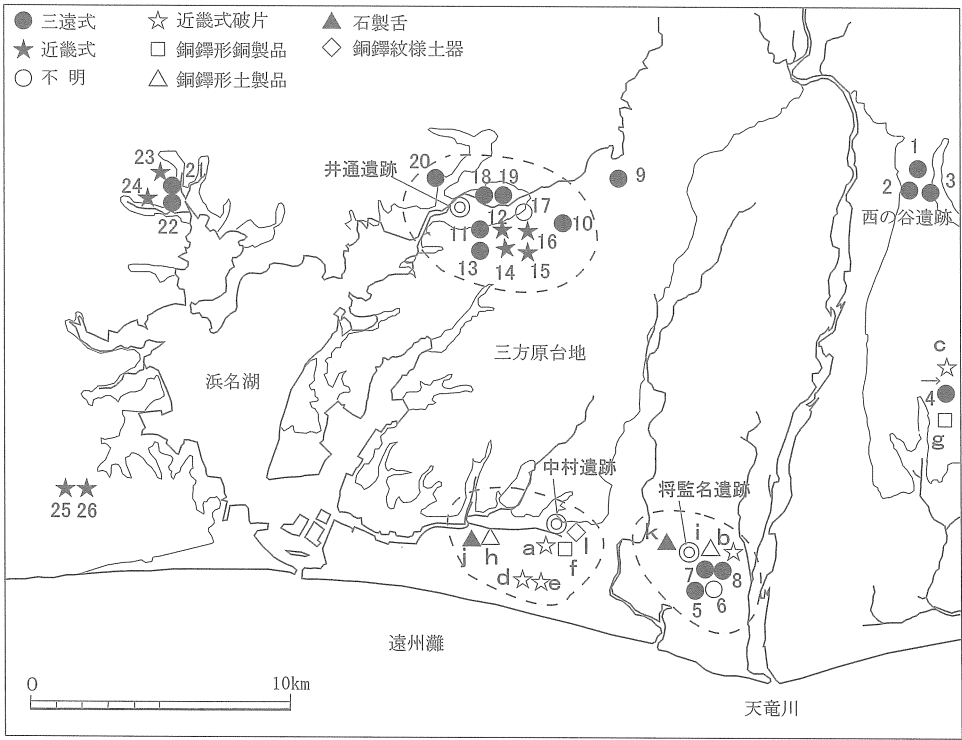
銅鐸分布の東限地域 銅鐸は古代から現在までに、近畿地方を中心にして、西の北九州から東の天竜川と千曲川を結ぶラインまでの間から500個を越す数が出土している。具体的には、西端は佐賀県の吉野ヶ里銅鐸であり、太平洋側の東端が静岡県掛川市の長谷銅鐸、日本海側の東端が長野県中野市の柳沢銅鐸である。一般的には、この範囲内で銅鐸祭祀が行われていたと考えられている。しかし銅鐸分布範囲と銅鐸祭祀の範囲が必ずしも同じとは限らず、異なる可能性もある。その点を考慮にいて、銅鐸および銅鐸関係品の出土状況を見ながら、西遠江が太平洋側の東限であるのかを再確認する。

遠江は、天竜川によって西遠江と東遠江に2分される。現在の行政区分では、西遠江が浜松市と湖西市および新居町にあたり、東遠江は西側から順に磐田市、袋井市、掛川市などとなっている。以下、遠江出土の銅鐸および銅鐸関係品を示すが、各遺物名において、〇〇銅鐸、〇〇遺跡出土銅鐸、〇〇出土銅鐸形土製品などの〇〇以外は省略する。また各研究者等によって銅鐸の名称が異なるものがある。その場合は、（ ）内に別名を列記する。

銅 鐸 三遠式は、磐田市の敷地1号、敷地2号、敷地3号、掛川市の長谷、浜松市の前原、船渡1号（別名：中川1）、船渡2号（別名：中川2、ベルリン博）、滝峯七曲り2号、小野（別名：日向郷）、木船1号（別名：永田1号）、木船2号（別名：永田2号）、悪ヶ谷、ツツミドリ1号（別名：芳川1号）、荒神山1号（別名：釣1号）、荒神山2号（別名：釣2号）がある。

他に、遠江から出土したという伝承があるギメー博（別名：伝遠江）、三方原古戦場から出土したと言

われている三方原がある。以上のうち、三方原と長谷は現在行方不明であり、出土記録と絵図面が残されているだけである。またツツミドリ2号（別名：芳川2号）も出土したとされているが、現在行方不明であり、三遠式か近畿式かさえ不明である。多くの集成表では除外されている。



第56図 遠江の銅鐸と銅鐸関係品

第9表 遠江の銅鐸と銅鐸関係品

銅鐸本体

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
1	敷地1号	磐田市	三遠式	
2	敷地2号	磐田市	三遠式	
3	敷地3号	磐田市	三遠式	
4	長 谷	掛川市	近畿式	絵図面のみ現存
5	ツツミドリ1号	浜松市	三遠式	
6	ツツミドリ2号	浜松市	三遠式？	行方不明
7	木船1号	浜松市	三遠式	
8	木船2号	浜松市	三遠式	
9	前 原	浜松市	三遠式	
10	三方原	浜松市	三遠式	絵図面のみ現存
11	悪ヶ谷	浜松市	三遠式	(銅鐸の谷)
12	滝峯七曲り1号	浜松市	近畿式	(銅鐸の谷)
13	滝峯七曲り2号	浜松市	三遠式	(銅鐸の谷)
14	不動平	浜松市	近畿式	(銅鐸の谷)
15	滝峯才四郎谷	浜松市	近畿式	(銅鐸の谷)
16	穴ノ谷	浜松市	近畿式	(銅鐸の谷)
17	コツサガヤ	浜松市	不 明	伝再埋納
18	船渡1号	浜松市	三遠式	
19	船渡2号	浜松市	三遠式	
20	小 野	浜松市	三遠式	
21	荒神山1号	浜松市	三遠式	
22	荒神山2号	浜松市	三遠式	
23	釣山田	浜松市	近畿式	
24	猪久保	浜松市	近畿式	
25	白須賀1号	湖西市	近畿式	紐のみ現存
26	白須賀2号	湖西市	近畿式？	行方不明
27	ギメー博	不明	三遠式	伝遠江

銅鐸破片

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
a	梶 子	浜松市	近畿式	飾耳
b	松 東	浜松市	近畿式	飾耳
c	掛之上	袋井市	近畿式	
d	浜松南方海岸1	浜松市	近畿式	飾耳
e	浜松南方海岸2	浜松市	近畿式	飾耳

銅鐸形銅製品（小銅鐸）

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
f	伊 場	浜松市	—	
g	愛野向山	袋井市	—	

銅鐸形土製品

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
h	角 江	浜松市	—	
i	森 西	浜松市	—	大型品

石製舌

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
j	角 江	浜松市	—	
k	将監名	浜松市	—	

銅鐸紋様の土器

記号	名称・遺跡名	出土地	型 式	備 考
l	伊 場	浜松市	—	伊場様式

近畿式は、湖西市の鍛冶ヶ谷1号（別名：白須賀1号）、鍛冶ヶ谷2号（別名：白須賀2号）、浜松市の釣山田（別名：分寸、山田）、猪久保、滝峯七曲り1号、滝峯才四郎谷、不動平、穴ノ谷がある。この中で鍛冶ヶ谷2号（別名：白須賀2号）は現在行方不明であり、出土記録と絵図面が残されているだけである。

以上の中で、天竜川の東側から出土したものは敷地1～3号と長谷だけであり、他はすべて西遠江の出土である。2例の例外はあるが、銅鐸本体の東限は概ね天竜川として把握できる。

銅鐸の破片 浜松市の梶子、松東、浜松南方海岸1、浜松南方海岸2、袋井市の掛之上がある。梶子は、近畿式の飾耳であり、梶子遺跡（国鉄浜松工場内遺跡）第7次発掘調査において、集落の土坑から出土した。松東は、近畿式の飾耳であり、松東遺跡第2次発掘調査において、後世の攪乱土坑から出土した。浜松南方海岸1は、近畿式の飾耳であり、表面採取品である。出土地点は不明である。浜松南方海岸2も、近畿式の飾耳であり、表面採取品である。出土地点は不明である。掛之上は、近畿式の裾部小破片であり、掛之上遺跡第9次発掘調査で出土した。表面の下辺突線と裏面の内面突帯の位置関係を基に近畿式と推定されている。以上のように、破片はすべて近畿式である。

全国的に銅鐸破片の分布をみると、天竜川の東側には、前記の掛之上と沼津市の藤井原および伊豆の国市の段の3例がある。藤井原と段は小孔が開けられて垂飾用に加工されていることから、他とは異なる用途、または違った意味合いをもつと考える。銅鐸破片の分布について、藤井原と段を別に扱うべきと考えるならば、概ね天竜川を東限として評価することができる。掛之上は、敷地1～3号や長谷の銅鐸と同様、例外的に天竜川を東へ越してしまったと考える。

銅鐸形土製品 浜松市の森西と角江がある。角江は、角江遺跡第2次発掘調査において、旧河川の中から出土した。森西は、森西遺跡発掘調査において、井戸状遺構の中から出土した。発見されたのは鈕の一部であるが、復元すると高さ約30cmとなり、非常に大型品である。全国的にみても、これほど大きなものはない。

以前に、銅鐸形土製品分布の東限は角江遺跡であり、天竜川以東のものは鐸形土製品ではあるが、銅鐸を意識した銅鐸形土製品ではない（大野2004）と記した。その後、天竜川近くから森西が出土したため、現在では、銅鐸形土製品分布の東限は天竜川としてよい状況にある。

銅鐸形銅製品（小銅鐸）（註1） 浜松市の伊場と袋井市の愛野向山がある。伊場は昭和28～30年頃に集落を囲む3重の環濠付近から、土器と共に表面採取された。愛野向山は銅鏃を転用した舌を伴って木棺墓付近から出土した。

銅鐸形銅製品の分布域は関東平野まで広がっており、天竜川が東限ではない。しかし関東平野の銅鐸形銅製品は古墳時代の遺構から出土したものが多く、伝世品である可能性が高い。

銅鐸鑄型 名古屋市朝日遺跡を東限とする。そこより東側での出土例はなく、西遠江でも出土していない。しかし、三遠式が西遠江を中心に分布していることを考えれば、今後、鑄造に関する遺物が発見される可能性はある。

石製舌 浜松市の角江と将監名がある。角江は旧河川の中から、将監名は弥生時代後期後葉の方形周溝墓と旧河川が重なる地点から出土した。石製舌は島根県から西遠江までの間で20数例が出土しており、将監名が東の端にあたる。天竜川を東限としてよいであろう。

銅鐸紋様土器 その他に特殊なものとして、銅鐸と同じ紋様が描かれている土器がある。この土器は昭和48年の伊場遺跡第7次発掘調査で環濠から出土したが、そのまま倉庫に入り、最近行われた再整理で発見された。山中様式新段階の高坏の脚部に銅鐸の紋様と同じ綾杉紋、鋸歯紋、斜格子紋が描かれている。

銅鐸の使用時期 銅鐸は土器を伴う例がほとんどないため、使用されていた時期を推定することが非常に難しい。その状況は遠江においても同様であるが、幸いにも銅鐸の破片や銅鐸形土製品などの銅鐸

関係品から、間接的に銅鐸の使用時期を推測することができる。その遺物を次に記す。

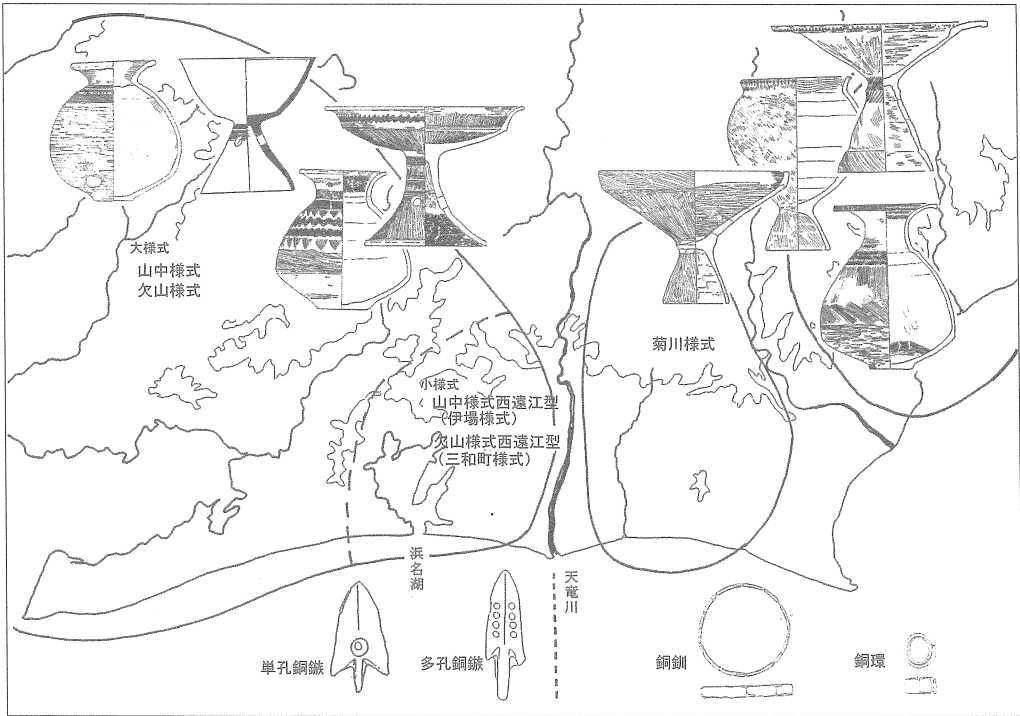
- 梶子：銅鐸破片が出土した土坑および周辺から、山中様式新段階の土器が出土している。
- 松東：銅鐸破片は攪乱坑出土であるが、遺跡の出土土器は山中様式新段階～欠山様式である。
- 森西：銅鐸形土製品とともに、井戸状遺構の下層から欠山様式の土器が出土している。
- 伊場：銅鐸形銅製品とともに、山中様式新段階の土器が表採されている。
- 伊場：銅鐸紋様土器は、山中様式新段階の高坏脚部である。

以上から、西遠江における銅鐸の使用は、遅くとも山中様式新段階（弥生時代後期中葉）に始まると考えられる。さらに、銅鐸関係品が廃棄されるまでの時間を考慮すれば、山中様式古段階（弥生時代後期前葉）に銅鐸が導入されたと考えられる。

背景にあるもの 天竜川が銅鐸祭祀の東限になった背景は、天竜川で隔てられた東西地域の社会的または文化的な違いにある。まず、土器様式が大様式レベルで異なっている。弥生時代後期、伊勢湾沿岸から天竜川西岸までの大様式は山中様式と欠山様式であり、西遠江においては、この大様式の中の小様式として、後期前半に山中様式西遠江型（伊場様式）、後期後半に欠山様式西遠江型（三和町様式）が分

第10表 東海地方の土器様式

時 期		伊勢湾岸地域	三 河	西遠江	天 竜 川	東遠江
中 期	中葉	貝田町	瓜郷	瓜郷		嶺田
	後葉	高蔵	長床	長床		白岩
後 期	前葉	山中 (山中様式)	寄道 (山中様式三河型)	伊場 (山中様式西遠型)		菊川 (古)
	中葉	欠山 (欠山様式)	欠山 (欠山様式三河型)	三和町 (欠山様式西遠江型)		菊川 (中)
	後葉					菊川 (新)



第57図 遠江の土器様式と青銅器分布

布している（鈴木敏2001）。天竜川の東は後期を通じて菊川様式である。この山中様式西遠江型（伊場様式）および欠山様式西遠江型（三和町様式）と菊川様式の間には、大きな隔たりがある。紋様は、前者が横線紋や波状紋に代表される西日本の櫛描紋系を使用しているのに対し、後者が縄紋および擬縄紋に代表される東日本の縄紋系を使用している。壺や高坏の器形や器種比率にも大きな違いが認められる。また、銅鐸以外の青銅器の分布にも違いがある。単孔銅鏃と多孔銅鏃は天竜川より西の地域に分布していて原則的に東へ越さないのに対し、帯状銅釧と銅環は天竜川より東の地域に分布していて原則的に西へ越さない。

銅鐸出現期直前の集落 最近の大規模な発掘調査によって、西遠江に銅鐸が導入された直前と考えられる弥生時代中期後葉（長床様式期）の大集落の発見が相次いでいる。三方原台地の南に位置する中村遺跡、天竜川西岸に位置する将監名遺跡、都田川平野に位置する井通遺跡である。これらの集落は、そ

れぞれ銅鐸および銅鐸関係品が密集する地域にあり、弥生時代後期に銅鐸を持つ集団の母体となる集落と考えられる。これらの経済力を持つ集落が銅鐸導入時に大きな役割を担ったのであろう。

中村遺跡は、伊場遺跡の北に位置する。中期中葉（瓜郷様式期）から中期後葉（長床様式期）までの数十基におよぶ方形周溝墓が東西700～800mにわたって連なっている。数軒の住居が検出されているものの、集落の中心部は未発見である。おそらく大集落が南方の平野部に広がっていると思われる。

将監名遺跡は、天竜川平野西岸の南部に位置する。集落は中期中葉（瓜郷様式期）から始まり、中期後葉（長床様式期）には、この地域の拠点となる大集落になっている。遺物も東方や西方から運ばれてきたものを多く含み、各地との交流が頻繁にあったことを伺わせる。

井通遺跡は、都田川の自然堤防上に位置する。井通遺跡の集落は、中間を弥生時代後期および古墳時代の河川に切られ、北集落と南集落に別れている。南集落は中期中葉（瓜郷様式期）から始まり、中期後葉（長床様式期）まで続く。北集落は中期中葉には墓域であったが、中期後葉



第58図 井通遺跡の弥生中期集落

(長床様式期)に集落に変わっている。中期後葉において、南集落と北集落はつながった大集落であったと推定される。

東・西地域の交流 敷地1～3号が出土した西の谷遺跡は天竜川の東側に位置する。なぜ天竜川の西側に分布する銅鐸が東側へ移動したのであろうか。その背景には、両地域の交流があったと考える。交流の一環として敷地1～3号が西の谷遺跡へ運ばれたのであろう。

人の交流を直接的に証明することは不可能であるから、遺構や遺物の移動から間接的に証明することになるが、その中で最も重要なものは土器の模倣と移動である。この分野の研究については、1991年に第8回東海埋蔵文化財研究会主催のシンポジウム『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器』、2001年に西相模考古学研究会主催のシンポジウム『弥生後期のヒトの移動』が開かれている。その資料を参考に、天竜川で隔てられた東西間の土器の模倣と移動について次に触れる。

西遠江の山中・欠山様式土器の中に、菊川様式の模倣品と搬入品が一定の比率で混じっていることが知られている。その比率は、天竜川平野の南部で5～10%、北部で約20%前後となる。南部では天竜川に近づくにしたがって比率が高くなり、天竜川沿いでは北に行くほど比率が高くなっている。北の比率が高い要因として、北に天竜川を渡る古道が想定されている。

それに対して菊川様式土器の中にも、山中・欠山様式の土器や紋様を模倣したものが混じっている。それが明確に分かるのが、山中・欠山様式西遠江型固有の器形である装飾高坏とその技法である台付甕接合部に巻かれた粘土帯である。天竜川の東側では、両者の出土する遺跡が点在している(大野2004)。

3. 三遠式銅鐸について

(1) 三遠式銅鐸の特徴と分類

三遠式銅鐸は三河および遠江を中心に分布する非常に画一性の高い銅鐸群であり、三河と遠江の頭文字をとって三遠式と名付けられている。近畿地方を中心に分布する近畿式銅鐸と共に、突線鈕式銅鐸を二分している。旧国名別に出土鐸を示す。

遠江は、浜松市の前原、船渡1号、船渡1号、滝峯七曲り2号、小野、木船1号、木船2号、悪ヶ谷、ツツミドリ1号、荒神山1号、荒神山2号、ギメー博、三方原、磐田市の敷地1号、敷地2号、敷地3号、掛川市の長谷がある。三河は、豊川市の源祖(別名:平尾)、豊田市の手呂、豊川市の伊奈1号、伊奈2号、伊奈3号、三河出土との伝承がある法蔵寺、豊橋近傍a、豊橋近傍b、豊橋近傍c、豊橋近傍d、岡崎市の洞がある。信濃は、塩尻市の柴宮、松本市の宮淵がある。尾張は、名古屋市の丸根(別名:中根)、春日井市の神領1号、神領2号がある。伊勢は、津市の野田(別名:専修寺)がある。近江は、野洲市の大岩山Ⅰ辰馬(註3)、大岩山Ⅱ3号、大岩山Ⅱ8号、大岩山Ⅱ9号がある。丹後は、舞鶴市の匂ヶ崎2号(別名:下安久2号)がある。出土地不明は、岡山県博、博古館がある。

以上の中で、宮淵は小破片のため、洞と神領2号および長谷は絵図面があるだけであるため、豊橋近傍a、豊橋近傍b、豊橋近傍c、豊橋近傍dは実測図等の資料がないため、分類から除外される場合が多い。

三遠式の特徴 その三遠式の特徴は、鋸歯紋に交互鋸歯紋を使用する、横帯を上下2段に分割して綾杉紋を施す、軸突線に細線を伴う、2重区画細線を使う、鈕の内縁に重弧紋を描く、縁辺部が厚い飾耳を左右の鱗に3対もつ、横帯および横軸突線が縦帯および縦軸突線を切る、横軸突線が鱗上に伸びる、菱環部が舞と接する部分に平行線を入れる、吊り手の菱環が分厚い、身の平面形が銀杏形である、内面突帯が幅広く高いなどである。

従来、三遠式は細部にわたって画一性をもっており、紋様構成等のルールを厳然に守り、ルールから外れるものはほとんど存在しないとされてきた。しかし実際に細部を観察すると、非常に多様性に富み、すべてに共通する特徴は少ない。したがって三遠式を包括的に規定することは非常に難しいが、あえていえば、「外縁が肉厚な人間の耳に似た飾耳を左右の鰭に3対もち、横軸突線が鰭を貫く突線鈕式銅鐸」とするのが最も適切である。

分類・編年の研究 三遠式の分類・編年は難波洋三氏の分類（以後、難波分類）に始まり、その後、難波分類を基にして進藤武氏、栗原雅也氏、大野勝美が具体的な銅鐸名を示した分類・編年表を発表している（以後、進藤分類、栗原分類、大野分類）。

難波分類（難波1986）は、鈕の紋様帯区画線構成の中で最も多い、外周が突線3条と細線1条、外縁第1紋様帯と第2紋様帯の界線が細線2条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が細線1条と突線3条、菱環と内縁の界線が細線2条、鈕孔の輪郭が細線2条のものを最も安定した型式として三遠3式とした。また外周突線が2条で軸突線も2条1組のものを三遠1式、外周突線は3条であるが3式の完成した鈕紋様帯区画線構成になっていないものを三遠2式、3式の鈕紋様帯区画線構成から更に界線数が増えたり細線が突線化したものを三遠4式とした。三遠1～4式は、順次、製作年代が新しくなると編年した。

進藤分類（進藤1993）は、基本的には難波分類を引き継いだが、三遠1～2式を大幅に修正し、三遠3式を綾杉紋および細線の違いにより3Ⅰ式と3Ⅱ式に細分した。また尾張・近江出土鐸は細線の突線化と近畿化が進んでいるとして、2式から4式に移した。

栗原分類（栗原2003）は、基本的には難波分類を引き継いだが、突線に伴う細線を重視し、その組み

合わせの違いにより難波分類の一部を修正した。

第11表 各氏の三遠式銅鐸の分類

番号	名 称	旧国名	進藤分類	栗原分類	大野分類
1	前 原	遠江	1式	1式	3式
2	船渡2号	遠江	1式	1式	1式
3	大岩山Ⅰ辰馬	近江	1式	1式	2式
4	大岩山Ⅱ3号	近江	1式	1式	4式
5	岡山県博	—	1式	1式	1式
6	柴 宮	信濃	2式	2式	3式
7	滝峯七曲り2号	遠江	2式	2式	3式
8	船渡1号	遠江	2式	2式	3式
9	敷地2号	遠江	2式	2式	2式
10	荒神山2号	遠江	2式	2式	3式
11	小 野	遠江	2式	3式	1式
12	木船1号	遠江	3Ⅰ式	3式	2式
13	木船2号	遠江	3Ⅰ式	3式	2式
14	敷地1号	遠江	3Ⅰ式	3式	2式
15	敷地3号	遠江	—	3式	2式
16	悪ヶ谷	遠江	3Ⅰ式	3式	2式
17	ツツミドオリ1号	遠江	3Ⅰ式	3式	2式
18	源 祖	三河	3Ⅰ式	3式	2式
19	手 呂	三河	3Ⅰ式	3'式	2式
20	博古館	—	3Ⅰ式	—	2式
21	長 谷	遠江	3Ⅰ式	—	—
22	荒神山1号	遠江	3Ⅱ式	3'式	2式
23	ギメー博	伝遠江	3Ⅱ式	4式	4式
24	法蔵寺	—	3Ⅱ式	3'式	3式
25	神領1号	尾張	3Ⅱ式	—	4式
26	大岩山Ⅱ8号	近江	3Ⅱ式	2式	4式
27	大岩山Ⅱ9号	近江	3Ⅱ式	2式	3式
28	匂ヶ崎	丹後	3Ⅱ式	—	4式
29	伊奈1号	三河	4式	3'式	4式
30	伊奈2号	三河	4式	4式	4式
31	伊奈3号	三河	4式	4式	4式
32	丸 根	尾張	4式	4式	4式
33	野 田	伊勢	4式	4式	3式

大野分類（大野2002）は、鈕における突線と細線の構成、交互鋸歯紋の種類と規則性、綾杉紋の種類と形態を総合的に判断し、4型式に分類した。

各氏の分類に共通するのは、紋様構成の規則を厳格に守った画一的な銅鐸を基準型式（以後、定型）として設定し、定型に満たない紋様構成をしているものを前型式として、定型より条数増加や突線化および紋様の複雑化したものを後型式としている点である。定型は、難波分類で3式の一部、進藤分類で3Ⅰ式、栗原分類で3式、大野分類で2式である。

(2) 敷地銅鐸の位置づけ

敷地1号銅鐸 鈕の紋様帯区画線構成は、外周突線3条と細

線1条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が細線1条と突線3条である。交互鋸歯紋は、A面で8箇所、B面で4箇所に乱れ（三角形内部の平行線の方向が交互になっておらず、同じ方向のものが連続する）が認められる。そのうちの9箇所が横軸突線を挟んでいることから、確実な乱れは3箇所である。ほぼ規則正しく施されている。横帯の綾杉紋は、第2横帯と第3横帯の上下紋様帯に単一かつ同方向の綾杉紋が施されている。鈕内縁紋様帯は、A面に8個、B面に9個の重弧紋が施されている。

難波分類では、外周突線が3条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が突線3条であるから、定型の三遠3式となる。進藤分類と栗原分類でも、定型の三遠3式となる。大野分類では、外周突線の条数、規則正しい交互鋸歯紋、単一かつ同方向の綾杉紋であるから、定型の三遠2式となる。

敷地2号銅鐸 鈕の紋様帯区画線構成は、外周突線3条と細線1条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が細線1条と突線2条である。後者の突線が定型より1条少ない。交互鋸歯紋は、A面の1箇所に乱れが認められるものの、それは横軸突線を挟んだものであり、完璧な交互鋸歯紋といえる。横帯は綾杉紋ではなく、斜格子紋である。鈕内縁紋様帯は、A面に7個、B面に7個の重弧紋が施されている。

難波分類では、外縁第2紋様帯と菱環の界線が突線2条であり、定型より1条少ないことから三遠2式となる。進藤分類と栗原分類でも、同様に三遠2式となる。大野分類では、外周突線の条数、完璧な交互鋸歯紋、単一かつ同方向の綾杉紋であることから、定型の三遠2式となる。

敷地3号銅鐸 鈕の紋様帯区画線構成は、外周突線3条と細線1条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が細線1条と突線3条である。交互鋸歯紋は、A面で6箇所、B面で11箇所に乱れが認められる。そのうちの3箇所が横軸突線を挟んでいるので、確実な乱れは14箇所である。やや乱れが多いが、まだ規則正しく施されているといえる。横帯の綾杉紋は、第2横帯と第3横帯の上下紋様帯に単一かつ同方向の綾杉紋が施されている。内縁紋様帯は、A面に7個の重弧紋、B面に内向きの交互鋸歯紋が施されている。

難波分類では、外周突線が3条、外縁第2紋様帯と菱環の界線が突線3条であるから、定型の三遠3式となる。進藤分類では、敷地3号銅鐸出土が分類表の後になったために型式を示していないが、おそらく定型の三遠3式であろう。また栗原分類も、定型の三遠3式となる。大野分類では、外周突線の条数、交互鋸歯紋の乱れがやや多いがまだ許容範囲であること、単一かつ同方向の綾杉紋であることから、定型の三遠2式となる。

以上のように、難波分類、進藤分類、栗原分類では、1号鐸と3号鐸が定型の三遠3式、2号鐸が前型式の三遠2式となる。大野分類では、すべて定型の三遠2式となる。

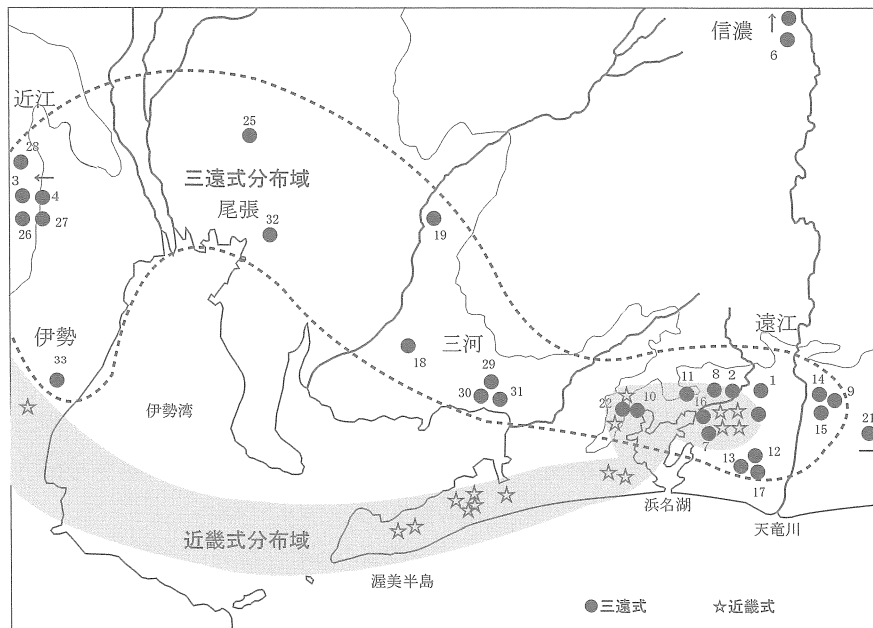
製作順序については、2号鐸→1号鐸→3号鐸の順で異論は無いと思う。2号鐸は、外縁第2紋様帯と菱環の界線が突線2条、横帯が斜格子紋である、完璧な交互鋸歯紋であるなど古い要素を多くもつ。3号鐸は、交互鋸歯紋に乱れが多いこと、内縁紋様帯の片面に鋸歯紋が施されていること、鱗の一部に綾杉紋があるなど新しい要素を多くもつ。

(3) 三遠式と近畿式

三遠式と近畿式の分布 第59図は東海地方における突線鈕2～4式銅鐸（近畿式と三遠式）の分布図であるが（註2）、この図から興味深い傾向が2点読み取れる。

一つ目は、近畿式と三遠式の分布域が異なる点である。三遠式の分布域は、尾張から三河、さらに浜名湖北岸から浜名湖東岸・南東岸地域に広がり、また、浜名湖北岸から天竜川を東へ越えた地域に達している。これに対し近畿式は、伊良湖半島から浜名湖西岸地域に至り、浜名湖北岸地域へと広がっている。以上のように、三遠式と近畿式の分布域は浜名湖北岸地域で重複する以外は異なっている。

三遠式の分布域は、前記した山中・欠山大様式の分布範囲と同じであり、天竜川東岸を除けば、ほぼ一致する。山中・欠山大様式の文化圏で三遠式が使われていたことは確実である。一方、近畿式はこの



第59図 三遠式と近畿式の分布

地域を避けるかのように紀伊半島南部から海を渡り、渥美半島を点々として浜名湖に至っている。この海のルートは明らかに船による移動が想定され、浜名湖の今切れ口から入り、北岸に上陸したのであろう。

問題は重複している浜名湖北岸地域である。三遠式と近畿式の両方を使っていたのか、それとも時期差によるものか、重要な問題である。いずれにしても、三遠式と近畿式の関係は排他的対立関係にはなかったと推定される。

二つ目は、三遠式の分布域に近畿式の破片が集中し、それと反対に近畿式の分布域に破片がない点である。この傾向は遠江および三河で顕著に認められる。浜名湖南東地域は三遠式の分布域であるが、ここから4個の銅鐸破片が出土している。また、天竜川東岸地域および東三河の豊川流域も三遠式の分布域であるが、ここからも各1個の銅鐸破片が出土している。それに対して、近畿式が分布する渥美半島および浜名湖西岸から北岸にかけての地域では、銅鐸破片が出土していない。

以上は単なる偶然かもしれないし、またこの地域の発掘調査が少ないために発見されていないだけかもしれない。今後とも注目すべき課題である。

三遠式と近畿式の関係 銅鐸の紋様に表れた両者の関係について触れる。三遠式と近畿式は別々の工房で製作されたと言われているが、両者は互いに影響しあい、三遠式の近畿化および近畿式の三遠化が進んだものが認められる。また、両者には特殊な紋様や技法を共有するものもある。こうした点からも、三遠式と近畿式の間に排他的対立関係はなかったと推定する。

三遠式の近畿化 尾張・近江出土の丸根、神領1号、大岩山Ⅱ8号では、細線の突線化が甚だしく進んでいる。これは明らかに三遠式の近畿化であり、近畿式の影響を大きく受けている。また近江・丹後出土の大岩山Ⅱ3号と匂ヶ崎2号では、交互鋸歯紋であるべきところが、すべて平行鋸歯紋となっている。また大岩山Ⅱ3号は近畿式の鈕脚壁が付けられている。これらも三遠式の近畿化である。遠江出土の敷地3号と滝峯七曲り2号では、片面の鈕内縁紋様帯に重弧紋であるべきところ、鋸歯紋が描かれている。これも三遠式の近畿化といえるであろう。

近畿式の三遠化 前者とは逆に、近畿式の三遠化も認めることができる。遠江出土の釣山田は近畿式であるが、平行鋸歯紋を使用すべきところ、すべて交互鋸歯紋となっている。これは三遠式の影響を受けたものであり、明らかに近畿式の三遠化といえよう。また、遠江出土の滝峯才四郎谷も近畿式であるが、飾耳が2重の同心円となっている。これは三遠式の飾耳の影響を受けた可能性が高い。

共通の紋様と技法 三遠式と近畿式の両方でみられる特殊な紋様と技法がある。その一つは、内縁紋様帯に描かれた重弧紋を一つずつ区切る特殊な紋様であり、三遠式の法蔵寺と近畿式の穴の谷および高

茶屋2号にみられる。次に、鰭下端突線を体部へ延長する技法であるが、これは鰭を補強する目的があると思われる。この技法は三遠式の野田、前原、大岩山Ⅱ9号などにみられ、また近畿式の大岩山Ⅱ10号と大福にみられる。

以上から、近畿式と三遠式は別の工房でそれぞれ個性的な銅鐸を製作していたと推測されるが、両者の関係は敵対的なものではなく、ある程度の交流があったと推定される。

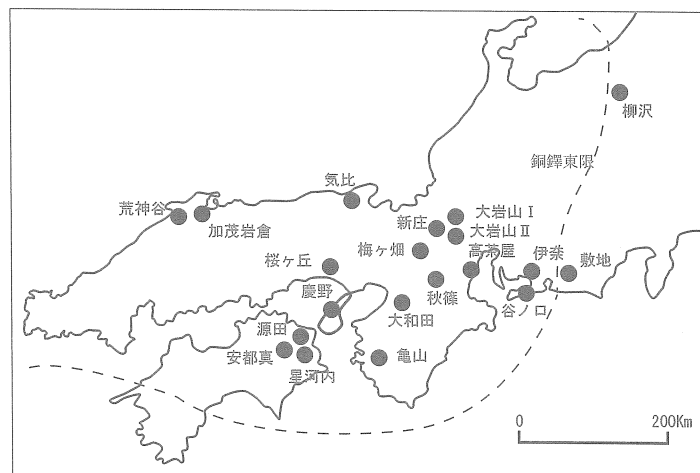
4. 銅鐸の多数埋納

西の谷遺跡の場合 敷地1・2号銅鐸が明治23年に山芋を掘りに来た人に発見され、それから34年後に梅原末治氏が『銅鐸の研究』の資料収集のために聞き取り調査を行った。出土地点（敷地1・2号銅鐸出土伝承地点）を示す木製の標柱（第3章第2節の写真1）は、その前後に立てられたものと推定する。その標柱は、今回の敷地3号銅鐸出土地点から約20m離れている。ここで1つの疑念が湧く。34年前の出土地点を正確に覚えていたのであろうか、との疑念である。若干の窪みを残していたとされているが、それはその後の34年間に掘られた山芋の穴の可能性もある。また当時は正確な地点を後世に残すという意識が低かったことであろう。最近の出土地点でさえ、標柱が立っている地点が出土地点でない例がある。

敷地3号銅鐸の出土地点は崖の直上であり、3号銅鐸も崖側に傾いた状態で発見されている。1～2号銅鐸が出土伝承地点ではなく、この崖の崩落した部分にあった可能性も考えておきたい。ただし、いずれにおいても敷地1・2号銅鐸と敷地3号銅鐸が同一斜面に埋納されたことに違いはなく、西の谷遺跡は3個もの銅鐸を埋納した場所として評価できる点に変わりはない。

全国の多数埋納地 同じ場所から3個以上の銅鐸が出土した例は全国で17例ある。型式順に記す。菱環鈕式～外縁付鈕式には、荒神谷、新庄、梅ヶ畑、慶野、気比がある。島根県の荒神谷では、銅矛16本と共に6個（菱環鈕式-1，外縁付鈕式-5）が鰭を上下にした状態で出土した。また、少し離れて銅剣358本が出土した。長野県の柳沢では、銅鐸5個（外縁付鈕式-5）と銅戈8本（大阪湾型-7、九州型-1）が出土した。滋賀県の新庄では、銅鐸4個（外縁付鈕式-4）が出土した。京都府の梅ヶ畑では、銅鐸4個（外縁付鈕式-4）が出土した。兵庫県慶野では、銅鐸3個（外縁付鈕式-3）が出土した。8個出土説もある。兵庫県の気比では、銅鐸4個（外縁付鈕式-4）が鰭を上下にした状態で出土した。

扁平鈕式には、秋篠、桜ヶ丘、大和田、亀山、星河内、加茂岩倉がある。奈良県の秋篠では、明治22年に銅鐸3個（外縁付鈕式-1、扁平鈕式-2）が出土し、江戸時代末に14～15間ほど離れた地点から4号鐸が出土している。兵庫県の桜ヶ丘では、銅鐸14個（外縁付鈕式-4 扁平鈕式-10）と銅戈7本（大阪湾型-6、九州型-1）が出土した。大阪府の大和田では、銅鐸3個（扁平鈕式-3）が出土した。和歌山県の亀山では、銅鐸3個（扁平鈕式-3）が出土した。徳島県の星河内では、銅鐸7個（扁平鈕式-7）が出土した。徳島県の安都真では、銅鐸4個（扁平鈕式-4）が出土し



第60図 全国の銅鐸多数埋納地

た。徳島県の源田では、銅鐸3個（扁平鈕式-2、突線鈕式-1）が出土した。島根県の加茂岩倉では、銅鐸39個（外縁付鈕式～突線鈕式）が鑄を上下した状態などで出土した。

突線鈕式には、大岩山Ⅰ、大岩山Ⅱ、高茶屋、谷ノ口、伊奈、敷地がある。滋賀県の大岩山では、1881年に銅鐸14個（突線鈕式-14）、1962年に銅鐸10個（突線鈕式-10）が出土した。鑄を上下した状態で出土したと推定されている。三重県の高茶屋では、銅鐸4個（近畿式-4）が出土した。2個は破片で、他は鑄を上下にした状態で出土した。愛知県の谷ノ口では、銅鐸3個（近畿式-3）が出土した。愛知県の伊奈では、銅鐸3個（三遠式-3）が鑄を上下した状態で出土した。静岡県敷地では、銅鐸3個（三遠式-3）が出土した。

埋納方法等の共通点 多数埋納地には次の共通点があると思われる。

- ① 横倒しにして鑄を上下にした状態で埋めている。荒神谷、気比、加茂岩倉、高茶屋、伊奈、敷地3号はこの状態で発見され、桜ヶ丘、大岩山Ⅰ、大岩山Ⅱ、敷地1～2号は、土壌の付着状態や鑄の発生状況から、この状態で埋められていたと推定されている。この埋納方法は1～2個の場合でも同じであり、銅鐸を埋める時の全国的な「きまり」であったと推定される。
- ② 同一または前後の型式でまとまっている。例えば、柳沢、新庄、星河内はすべてが同一型式である。また異なる場合でも前後する型式であり、かけ離れた型式との混在はない。特に大岩山の場合、24個すべてが突線鈕式である。
- ③ 大量埋納地では、他の青銅器が共伴する。荒神谷、桜ヶ丘、柳沢など、銅鐸の出土数が多い出土地にかぎり武器形青銅器が共伴している。
- ④ 例外もあるが、多数埋納地はその型式の分布域のはずれに位置している。外縁付鈕式では、西端の島根県荒神谷、東端の長野県柳沢、北端の気比である。扁平鈕式では、西端の島根県加茂岩倉、南西端の徳島県星河内および安都真および源田、南端の和歌山県亀山である。突線鈕式の近畿式では、北西端の大岩山、東端の谷ノ口である。三遠式では、西端の大岩山、東端の敷地である。

多数埋納の目的 なぜ銅鐸の多数埋納が行われたのかについては、統合集積説、配布集積説、緊急隠匿説、合同祭祀説、合同保管説、不要廃棄説、宝物隠匿説等が考えられる。統合集積説は、小さな集団が大きな集団に統合されていく過程で集められたものが埋められたとするものである。配布集積説は、周辺地域に配る前に集められたものが何らかの理由で埋められたとするものである。合同祭祀説は、周辺の集団が祭祀を合同で行い同一地点に埋めたというものである。合同保管説は、周辺の集団が同じ場所に埋めて保管したとするものである。緊急隠匿説は、外敵の侵入時に略奪されないように隠し埋めたとするものである。宝物隠匿説は、宝物が盗まれないように埋めて保管していたというものである。不要廃棄説は、不要になったため埋めて廃棄したというものである。

不要廃棄説は、青銅の原材料としての貴重さを考えれば評価し難い。緊急隠匿説と宝物隠匿説も現在では説得力を欠く。問題は統合集積説、配布集積説、合同祭祀説、合同保管説である。統合集積説にとって、①は有利な材料であるが、②と④は不利な材料にもなる。配布集積説にとっては、②と③と④が有利な材料になるが、埋納理由が問題になる。合同祭祀説にとって、①と④は有利な材料であるが、②と③は不利な材料にもなる。合同保管説にとっては、③は有利な材料になるが、②と④は不利な材料にもなる。もちろん、一つの説に集約すべきものではないかもしれない。いずれにしても、多数埋納の諸状況を理解していくことは、銅鐸祭祀および埋納の背景を考える上で重要な事項であると思われる。

註

1. ここでは、小銅鐸という名称は小型の銅鐸と誤解されやすいので、それを避けるため銅鐸形銅製品の名称を使う。銅鐸と銅鐸形銅製品は、用途および所有形態において明確に異なると考える。
2. 東海地方から出土したとされる近畿式に、三河の豊沢銅鐸と尾張の伝名古屋城堀銅鐸があるが、両者の出土および出土地については疑問がある。したがって図から除外する。
3. 滋賀県の大岩山からは、1881年に14個、1962年に10個の銅鐸が同一地点もしくは近接した地点から出土している。前者を大岩山Ⅰ、後者を大岩山Ⅱと表示する。

参考文献

- 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館 1991 『愛知の銅鐸』
- 石橋茂登 2004 「東海地方の突線鈕式銅鐸について」『八賀晋先生古希記念論文集』
- 梅原末治 1927 『銅鐸の研究』 大岡山書店
- 大野勝美 1996 「いわゆる伊場様式の装飾高坏」『湖北考古』1 湖北考古同好会
2002 「三遠式銅鐸の分類と編年」『研究紀要』9 静岡県埋蔵文化財調査研究所
2004 「銅鐸形土製品考—銅鐸祭祀の東限を考える—」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』
- 蒲郡市郷土資料館 1981 『三河の銅鐸』
- 栗原雅也 2003 「三遠式銅鐸の突線に伴う細線—三遠式銅鐸の成立に関する試論—」『続文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査委員会 1969 『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書』本編
- 佐原 真 1960 「銅鐸の鑄造」『世界考古学大系』2
1974 「三遠式銅鐸の誕生」「銅鐸のまつり」『古代史発掘—大陸文化と青銅器—』5
1964 「銅鐸」『日本原始美術』4
2002 『銅鐸の考古学』 東京大学出版会
- 佐原 真・春成秀爾 1982 「銅鐸出土地名表」『考古学ジャーナル』210
- 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3（考古3）
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996 『角江遺跡Ⅱ』
2000 『西の谷遺跡発掘調査概報』
2008 『井通遺跡Ⅱ』
- 芝田文雄 1969 「三遠式銅鐸の成立（上）」『遠江考古学研究』3
- 島根県教育委員会・加茂町教育委員会 2002 『加茂岩倉遺跡』
- 島根県教育委員会 1996 『出雲神庭荒神谷遺跡』
- 進藤 武 1993 「三遠式銅鐸一考」『滋賀考古』9
1995 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』47—10
- 鈴木敏則 2001 「三河・遠江系土器の移動とその背景」『シンポジウム資料集 弥生後期のヒトの移動—相模湾から広がる世界』
- 田村隆太郎 2002 「敷地1・2号銅鐸埋納方法の復元」『研究紀要』9 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 長野県文化振興事業団・長野県埋蔵文化財センター 2009 「柳沢遺跡」『長野県埋蔵文化財センター年報25』
- 中村光司 2000 「高茶屋銅鐸観察ノート」『津市埋蔵文化財センター年報』4 津市埋蔵文化財センター
- 難波洋三 1986 「銅鐸」『弥生文化の研究』6
- 浜松市・浜松市教育委員会・浜松市文化協会 1990 『都田地区発掘調査報告書』下巻
- 浜松市博物館 2007 『浜松市の銅鐸』
- 浜松市文化協会 1990 『松東遺跡Ⅱ』
2005 『梶子北（三永）・中村遺跡』弥生時代編
2005 『中村遺跡』遺構本文編
- 浜松市文化振興財団 2005 『森西遺跡』
- 松井一明 2005 「伊場遺跡出土の小銅鐸に関するコメント」『浜松市博物館報』17
- 三木文雄 1995 『日本出土青銅器の研究』